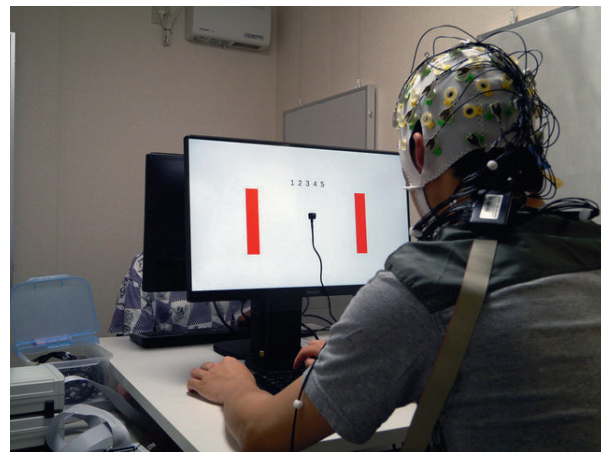


長くて短い心理学の歴史 心理学

「心理学の過去は長いが歴史は短い」とは、記憶の忘却曲線で有名なエビングハウスの言葉である。これに対する批判もあるが、現在の心理学の授業においてもまことしやかに教えられるのが、近代心理学は1879年に始まったというものである。19世紀に入ると、感覚や知覚の仕組みを探る生理学や精神と物質の数量的対応関係の解明を目指した精神物理学が台頭し、科学的心理学の揺籃期を迎えた。そのような中、もともと生理学者であったヴントが自然哲学担当の教授として招聘されたライプチヒ大学に心理学実験室を開設し、大学の正式なカリキュラムとして心理学演習が加えられたのが1879年である。ヴントは心理学を経験の科学とし、哲学から切り離れたとして実験心理学の父と呼ばれているが、実は生理学からの独立も重要な点である。生理学では生体に特定の操作を加えた際に外部に現れてくる反応を解析対象とするが、ヴントはそれを心理学に持ち込み、外部から遮断された実験室において実験的に操作した外部からの刺激により変化する被験者の意識過程を、被験者自身がつぶさに観察し逐一報告するという実験的内観法を確立した。現在の心理学においてこの内観法はほとんど用いられていないが、実験的方法の枠組みは受け継がれている。もちろんヴントだけが近代心理学を成立させたわけではないが、ここを起点として現在の心理学は存在する。その後の歴史を概観すると、20世紀初頭に内観法は自然科学的ではないと批判し、被験者の内面世界を排除したワトソンの行動主義が興り、ゲシュタルト学派からの批判はあったものの、基本的にはその考えが通奏低音のように響く上に、生体を一種の情報処理システムと見なす認知心理学が生まれ、さらにヒトを対象とした脳・身体計測研究を巻き込みながら、現在の(実験)心理学が形成されている。心理学の自然科学化は今でも進んでいるが、心を科学するのは本当に難しい。

田邊宏樹 教授



脳波実験の様子

日本語教育のための日本語文法研究 日本語教育学

日本語教育学分野では理論と実践を兼ね備えた日本語の教育・研究者を養成しています。修了生は日本の北海道から沖縄まで、さらに中国、台湾、韓国、タイ、マレーシア、カンボジア、サウジアラビアなど世界各地の大学や研究機関で日本語教育や日本語研究に携わっています。

私の専門は現代日本語文法です。文法というと未然、連用、終止、連体、假定、命令といった動詞の活用を連想する人が多いと思いますが、日本語学習者も動詞の活用はすぐに覚えます。日本語学習者にとって難しいのは、次のような自動詞、他動詞、受身の使い分けです。

- (1) 電池が切れて時計 {が止まった / を止めた / が止められた}。
- (2) 風が吹いて窓 {が閉まった / を閉めた / が閉められた}。
- (3) 落葉樹は秋になると葉 {が落ちる / を落とす / が落とされる}。

日本語母語話者は(1)も(2)も単なる自然現象と捉えて自動詞の「止まる」、「閉まる」を選択します。しかし、中国人日本語学習者は(1)はほぼ全員「止まる」を選択しますが、(2)は風による作用と捉えて他動詞の「閉める」や「閉められる」を選択する人が多いです。

一方、(3)では中国人日本語学習者は単なる自然現象と捉えて自動詞の「落ちる」を選択しますが、日本語母語話者は自動詞の「落ちる」も他動詞の「落とす」も選択します。「落ちる」を選択した人は落葉を単なる自然現象と捉え、「落とす」を選択した人は擬人法で落葉樹が自分で葉を落下させると捉えているのです。

このような事態(event)の捉え方の違いには母語の影響があると考えられます。そこで私の研究では、学習者の母語と学習者の日本語を比較することにより、どのような場合にどのような影響が現れるかを観察し、日本語学習者の母語に応じた文法説明を追究しています。

杉村泰 教授



日本語の研究をする中国人留学生達と

学びを支える習慣 ドイツ語ドイツ文学

十八世紀ドイツの哲学者カントは、その著作だけでなく、厳格な性格でも有名であった。毎日決まった時刻に食事、読書、散歩を行い、町の人々が彼の行動を見て時計を合わせたと言われるほどである。研究活動と聞くと、複雑で創造的な営みを思い浮かべるかもしれない。しかし、文学部で学ぶうちに、研究とはむしろ、このような日々の習慣化された行為の積み重ねによって成り立っていることを実感するようになった。

ドイツ語ドイツ文学分野では、ドイツ、オーストリア、スイスといったドイツ語圏の文学、思想、文化を研究対象としている。演習では、文学作品に限らず、さまざまなドイツ語のテキストに触れる。そこでは、ドイツ語を正確に理解するだけでなく、文章の背後にある思想や歴史的背景にも注意を払いながら読み進める姿勢が求められる。また、ゼミには学部生から博士後期課程の大学院生まで幅広く参加し、学年や研究テーマを超えた活発な議論が行われる。そうした多様な話題に触れるうちに、一見無関係に思える事柄から、思わぬ着想を得ることもある。

授業に参加する傍ら、ひたすら文献を読み研究ノートに整理する作業を続けるうちに、一段落ついて振り返ると次第に知識が積み重なり、自分なりの視点や考えが形を成していることに気づく。研究とは何もない場所から独力で新たな成果を生み出す行為では決してなく、学問の発展の先に新たな支流を創る行為である。そして研究の過程を支えるものは、文献を読み、議論し、書くという作業の継続に他ならない。

堀内七愛 学士課程4年



ドイツ語ドイツ文学分野の研究室(リテラボ)



月刊 名大文学部 第144号

隔月刊行



編集発行：
名古屋大学文学部広報体制委員会
koho@hum.nagoya-u.ac.jp
寄稿者の所属と学年は寄稿時点のものです。
2025年3月10日発行